| | |
|---|---|
| 氏名 | 韓　松怡 |
| 学位の種類 | 博士（社会福祉学） |
| 学位記番号 | 甲第 86 号 |
| 学位記授与の日付 | 2023 年 9 月 28 日 |
| 学位授与の要件 | 学位規程第３条第４項該当 |
| 学位論文題目 | 児童養護施設における共感疲労の精緻化に関する研究<br>ーインタビュー調査を通してー |
| 論文審査委員 | 審査委員長　有村　大士<br>審査委員　木村　容子<br>審査委員　贄川　信幸<br>審査委員　内田　宏明<br>学外審査委員　藤岡　孝志 |

# 児童養護施設における共感疲労の精緻化に関する研究

ーインタビュー調査を通してー

韓松怡

本研究の目的は、社会福祉領域における支援者支援という観点に基づき、児童養護施設における「共感疲労（Compassion Fatigue）」の構造を明確にし、共感疲労の精緻化をすることである。本研究から得られる結果と意義としては、日本の児童養護施設における職員の共感疲労の構造を明らかにし、職員のメンタルヘルスケアや組織に求められる支援策を提案することであった。

研究の方法としては、児童養護施設を退職した職員を対象に予備調査を行った。予備調査結果と先行研究の結果から本調査に向けた質問項目を作成し、児童養護施設の職員22名を対象にインタビュー調査を行い、質的データ分析法を用いて分析をした。分析の際には、３つの視点で分析を行った。

分析視点１では、共感疲労の関連要因、分析視点2では、共感疲労の要因の特徴、分析視点３では、共感疲労のプロセスを作成した。分析の際には共感疲労のプロセス図を作成して、精緻化を行った。

分析の結果、児童養護施設における共感疲労について３つの共感疲労の構造（ストレス優位の共感疲労、抑うつ優位の共感疲労、トラウマ優位の共感疲労）が明らかになった。

トラウマを中心とした共感疲労だけではなく、ストレスをベースとした共感疲労と抑うつをベースとした共感疲労が確認できた。

共感疲労の３つの構造よって必要な支援が異なり、職員が抱えている共感疲労を明確にしたことで、職員のメンタルヘルスケアだけではなく、子どもの養育の質を高めるための職員への支援について検討することができた。

さらに、職員の職場定着や人材確保という観点だけではなく、子どもの養育の質を高めるための職員への支援を通して、職員個人の資質確保・向上や人材育成を視野に入れて検討し、支援者への支援には「子どもへのより良い支援」、「組織の質の確保」、「高機能化及び多機能化を踏まえた支援体制つくり」などが重要であることが示唆された。

# A study on the elaboration of Compassion Fatigue in a residential children' s home
# : An interview-based study

Han, Song-Yi

The purpose of this study is to clarify the structure of "Compassion Fatigue" in residential children' s home and elaboration of Compassion fatigue from the viewpoint of support for care givers.

The results and significances obtained from this study were to clarify the structure of Compassion Fatigue among the caregivers in Japanese residential children' s home.

As a method of research, a preliminary survey was conducted on employees who retired from in residential children' s home.

Based on the results of the preliminary survey and the results of the previous study, questions for this survey were prepared, 22 employees in residential children' s home were interviewed and the qualitative data analysis method was used for analysis. The analysis was conducted from three perspectives. Related factors of Compassion fatigue in analysis viewpoint 1, characteristic factors of Compassion fatigue in analysis viewpoint 2, and a process of Compassion fatigue in analysis viewpoint 3 were analyzed.

A process diagram of Compassion fatigue was prepared and refined during the analysis. The analysis revealed three Compassion fatigue structures (stress-dominated Compassion fatigue, depression-dominated Compassion fatigue, and trauma-dominated Compassion fatigue).

Not only Compassion fatigue from the trauma was confirmed by the study but Compassion fatigue from depression and Compassion fatigue from stress were confirmed.

I suggest that providing support tailored to the type of compassion fatigue.
By clarifying the Compassion fatigue that employees have, the support to improve not only the mental health of employees but the quality of child-rearing can be differentiated.

In addition to the perspective of caregivers retention in the workplace and securing human resources, to improve the quality of child care, reviewing and improving the qualifies of the individual staff member and developing human resources to support staff by `Better support for children'', `Ensuring the quality of the organization'', and `Creating a support system based on high-performance and multi-functionalization' is implicated.

【審査結果の要旨】

１　審査委員の構成と審査の経過

博士論文審査は、日本社会事業大学大学院学則、同学位規程及び同博士後期課程修了細則に基づき、第 3 次予備審査及び最終審査から成り立っている。審査委員は、社会福祉学研究科委員会にて選任された大学院担当の専任教員 4 名及び学外審査委員 1 名が担当した。5 名の氏名と専門分野は以下のとおりである。

| | | |
|---|---|---|
| 審査委員長 | 有村　大士 | 子ども家庭福祉、児童福祉施設 |
| 審査委員 | 木村　容子 | 子ども家庭福祉、ソーシャルワーク実践モデル |
| 審査委員 | 贄川　信幸 | 精神保健福祉、プログラム評価、支援プログラムの普及 |
| 審査委員 | 内田　宏明 | スクールソーシャルワーク、学校福祉 |
| 学外審査委員 | 藤岡　孝志 | 子ども家庭福祉、臨床心理学 |

2022 年 10 月 31 日までに提出された第 3 次予備審査博士論文について、審査委員がそれぞれ精読し、11 月 26 日の公開口述試験を行った。それらの審査を踏まえた各審査委員の指摘事項を審査 委員長がとりまとめ、審査委員会は指摘事項に対応した論文の提出を受けて審査を行った。その結果、2023 年 9 月 7 日の社会福祉学研究科委員会にて審査委員会から合格とする審査結果が提案され、了承を得た。 本学学長は、これらの手続きを経て、2023 年 9 月 28 日に「博士(社会福祉学)」の学位を与えることとした。

２　博士論文の評価

本研究は、子どものケアを行う支援スタッフの共感疲労（Compassion Fatigue）について、モデルの改善に焦点を当てた研究である。共感疲労の特徴を慎重に扱い、子どものケアを行う支援スタッフのケアの質に影響を与える共感疲労について質的調査法によって、本研究は支援スタッフに対する支援のあり方を考慮することが期待されています。共感疲労の構造の改善と Figley のプロセスモデルの改善の必要性は、以前の研究レビューで指摘されており、本研究はこの必要性に取り組む貴重な研究である。

研究は、予備調査と実際の調査の 2 つの段階で慎重なアプローチを取りながら、22 名の児童養護施設職員から得られた質的データを丁寧に分析した。研究は、共感疲労の 3 つのタイプと共感疲労に至るプロセスを明確にし、各タイプの支援スタッフの特性を考慮した共感疲労のオリジナルのモデルを提示した。本研究の意義は、共感疲労のモデルを改善する学術的な価値だけでなく、支援者支援の観点から共感疲労を防止する方法を示唆する点にある。

本研究は、共感疲労に関する新しい洞察を提供した一方、改善を必要とする点もある。被験者の選択基準は、支援スタッフがトラウマや共感疲労の経験に対して異なる視点があり、より慎重に検討する必要があった。また、ストレス研究や共感疲労の研究の既存の知識を超えた、本研究の知見の価値に関するさらなる検討が、研究の学術的・実践的な意義を強化できた可能性は高い。

しかし、本研究は博士論文のレベルに達し、第 3 次予備審査について合格とする。今後の研究活動によって、従来の研究を超えた共感疲労に関する新しい洞察を提供することによって、子ども家庭福祉、社会的養護の領域への貢献が期待される。

３　最終試験の評価

1　研究課題を科学的に追求する自立した研究能力

最終提出までに誤字脱字や校正等、いくつかの修正は必要なものの、本研究からは自立した研究を行っていく能力が認められた。共感疲労について、質的調査を用いながら、丁寧に研究と分析を進め、これまで共感疲労の研究で明らかとなってこなかったプロセスや新たな視点の発見を含め、整合性のある博士論文に仕上がっていることについて、評価できる。

2　社会福祉実践の向上や発展に資することのできる高度の実践的研究能力

本研究では、研究の性格上、量的な分析は含まれていない。従って、質的な検討によるものであるが、先行研究を踏まえ、実践者へのインタビューに基づく検討を行うことにより、新たなモデルの構築を行っている点など、特筆すべき成果があることから、高度な実践的研究能力が認められる。

3　社会福祉学の豊かな学識

ケア現場における支援者支援は、社会福祉の領域だけでなく、心理学といった関連領域の知識も必要とする総合的な知見が求められる領域である。本研究を、博士論文としてまとめている点で、豊かな学識があると認められる。